

高部宿の天日様

◇天日様とは

高部宿には「天日様」と呼ばれ、信仰されている社があります。由来については明らかではありませんが、呼称から、天妃神または天神（天満宮）を祀っている可能性が考えられます。

天妃神とは中国で宋代（10～13世紀）に生まれた海の女神で、中国では「媽祖」と呼ばれていました。船乗りにより信仰され、媽祖神の像を祀る廟（ほこら、社）が港や海を臨む小高い丘などに作られました。媽祖信仰が日本にもたらされたのは、神像の制作年代や廟の創建などから考えると、15世紀から16世紀にかけての時期と思われます。当時の中国の王朝、明と琉球王朝の交流の中でもたらされたとも、中国から主に西日本に渡来した人々の影響ともいわれています。

現存する媽祖神像は、沖縄、鹿児島、長崎、茨城、青森など国内で30例以上が確認されています。中でも長崎県をはじめとする九州地方が圧倒的です。



▲大洗町の弟橘比売命神社

茨城県では大洗町磯浜町、北茨城市磯原、水戸市の祇園寺、小川町旧天聖寺墓地に天妃神が祀られています。小川町の天妃神については海辺ではありませんが、内陸に祀られる例も珍しいことではないようです。水戸藩は神道を保護する一方、民間信仰や土俗的な風習は排除したため、中国由来の神である天妃神もその対象となりました。大洗と北茨城の天妃神については、水戸藩二代藩主光圀が招来した由緒をもつものにもかかわらず、九代藩主齊昭によって祭神を弟橘比売命に代えられてしまいました。かつて大洗の天妃神にあった神像は齊昭により没収され、現存していません。

◇高部宿の天日様

では、海洋神である天妃神（媽祖）と高部宿の天日様には関連があるのでしょうか。高部宿の天日様は、緒川が高部宿に流れ込む地点の右岸にあります。現在は緒川の上に高部橋がかかり、宿通りを東西に結んでいますが、かつてはここで川を渡らずに緒川沿いに少し南下した地点で鉤の手に折れて、諏訪神社方面へ北上する道と檜沢・山方方面へ東進する道とに分岐していました。天日様はこの分岐点の手前に建てられています。社の中に入っているのは注連縄がかけられた、高さ2m程の石碑で、それを覆うために社が作られています。残念ながら石碑は磨耗のため、刻銘の有無さえもわからなくなっています。



▲高部宿の天日様

高部宿の天日様は、もともとは、その近くで酒造業を営んでいた国松家の氏神でした。今から40年程前までは、天日様の祭日には地元の人々も参加し、にぎやかに行われたそうです。祭りが途絶えて久しくなり、現在は祭日も定かではありません。

国松家では天日様は天神（天満宮）のことと伝えられてきたそうです。天日様の社の隣に建つ石碑は天神を祀ったもので、風化のため刻銘が明瞭ではありませんが、天神とされる菅原道真の紋（梅鉢紋）と「天満神」という文字を読み取ることができます。



▲天日様の隣に建つ天満宮の石碑

現在までのところ、高部宿の天日様が何を祀ったものなのか断定することはできません。隣接する高部三ツ木地区には天祖神社という名の天満宮があるので、ある時期に天満宮の各地への勧請（神仏の分霊を迎えて祀ること）が行われたのではないかと考えられます。

※参考文献 藤田明良「日本近世における古媽祖像と船玉神の信仰」（中央研究院人社中心亞太區域研究專題中心編『近現代日本社會的蛻變國際檢討會論文集』2006）